

教師の「私」が今の実践に辿り着くまで —私を変えたエピソード—

本企画では、リフレクティブな視点からの教師の成長について、岩瀬直樹氏の実践を通じて考えます。岩瀬氏は約20年間、埼玉県内の公立小学校で、子どものリテラシーを伸ばす教育実践を中心に様々な実践を行ってきました。その後、大学で教員養成に携わっています。また岩瀬氏は、12月の本会の研究集会の登壇者の苦野一徳氏と教育理念を共有し、軽井沢風越学園を設立する発起人の1人でもあります。岩瀬氏を軽井沢風越学園というまったく新しい「学校」の創設に駆り立てるものは何なのか。「公教育」や「学校」の「当たり前」を問う視点はどこから生まれたのか。岩瀬氏いわく、自分自身の実践の「当たり前」を、自己批判として問い直す視点が、新しい実践の起動力となり得たとのこと。本企画はその岩瀬氏の、ともすれば「痛い」自己批判につながる実践の「振り返り」を、具体的なエピソードを中心に日本語教育の分野で活動する神吉氏が聞きます。神吉氏と岩瀬氏は大学時代の同級生、悪友・親友として、けなしあったり認め合ったりしながらそれぞれの分野で教



対談
岩瀬直樹氏
神吉宇一氏

ラーニングバー形式、好きなお飲み物、おつまみ、ご持参歓迎です。会場でも飲み物、おつまみを用意してお待ち致します。もちろん手ぶらでも大丈夫です。

2017年
10月27日(金)
18:00-19:45
早稲田大学22号館
8階会議室

育実践を続けてきました。小学校教員を経て日本語教育の世界に入った神吉氏ならではの視点で、岩瀬氏の実践を日本語教育の文脈におろして考えます。日本語教育や言語教育を実践するわれわれにとっての「当たり前」とは何だろうか？日本語教師の「私」の現場では、相変わらず知識やスキルの積み上げを目標としがちになっていないだろうか？神吉氏が聞き手となり、岩瀬氏の実践を変えたエピソードを引き出すことにより、岩瀬氏の教育一般の問題提起を日本語教育の文脈における議論に発展させます。本企画の目指すゴールは、本会の終わりに、参加者が自らの中にある、自分にとっての「当たり前」を問い直し、自分の中にある、「もやもや」や「違和感」を意識化し、それをすっきりさせることなくそのまま自分の「問い」として持ち帰ることです。対談の終わりには参加者が自由に自分の実践について語る時間も設けます。カタルシスなき「もやもや」を、明日からの「私」の実践に持ち込むこと。それが、参加者が自らの「問い」を考え続け、教室・学びの場をダイナミックに変革することにつながることを願って、この対談を企画しました。

対談

岩瀬直樹氏（東京学芸大学教職大学院准教授）

神吉宇一氏（武蔵野大学大学院准教授）